

小・中学校

平成11年度

教育研究員研究報告書

教育課題

東京都教育委員会

平成11年度
教育研究員名簿（教育課題）

分科会	地 区	学 校 名	氏 名
第 1 分 科 会	杉 並 区	四 宮 小 学 校	○ 望 月 保 美
	板 橋 区	北 野 小 学 校	松 野 泰 一
	福 生 市	福 生 第 二 小 学 校	小 澤 新 也
	東大和市	第 三 小 学 校	豊 田 克 史
	新 宿 区	戸 塚 第 一 中 学 校	山 田 勝 基
	八王子市	四 谷 中 学 校	植 木 俊 孝
	三 鷹 市	第 七 中 学 校	井 上 竜 太
	昭 島 市	清 泉 中 学 校	川 窪 公 夫
第 2 分 科 会	世田谷区	山 野 小 学 校	大 門 浩
	渋谷区	猿 楽 小 学 校	◎ 後 藤 馨 子
	葛 飾 区	花 の 木 小 学 校	渡 邊 浩
	町 田 市	成 瀬 中 央 小 学 校	小 竹 幸 子
	台 東 区	台 東 中 学 校	○ 牧 野 互
	江 東 区	第 三 砂 町 中 学 校	田 島 伸 二
	豊 島 区	池 袋 中 学 校	山 根 友 昭
	江戸川区	二 之 江 中 学 校	山 口 孝

◎世話人 ○副世話人

(担当) 都立多摩教育研究所指導主事 石 井 洋一郎
教育庁指導部指導企画課指導主事 小 山 利 一

目 次

I 共通主題	1
1 主題設定の理由	1
2 研究の仮説	2
3 研究構造図	2
II 第1分科会の研究	3
1 研究主題についての基本的な考え方	3
2 研究の方法	3
3 研究の仮説	4
4 研究構想図	4
5 意識調査	5
6 清掃活動を通した児童・生徒理解	6
(1) ねらい	6
(2) アンケート調査	6
(3) 日常生活での教育相談的手法	6
(4) 関連的指導での教育相談的手法	8
(5) 実践事例	9
7 研究の成果	12
8 今後の課題	12
III 第2分科会	13
1 研究主題設定の理由	13
2 研究の仮説	13
3 研究構想図	14
4 実践研究	15
実践事例1	15
実践事例2	17
実践事例3	19
5 第2分科会のまとめ	22
(1) 研究の成果	22
(2) 今後の課題	22
IV 研究の成果と今後の課題	23
1 研究の成果	23
2 今後の課題	23

I 共通主題

豊かな心を育てる生活指導

1 主題設定の理由

現在、私たちが接している児童・生徒は、一人一人を見ると明るく、人なつっこい面が見られる反面、学業や進路、人間関係など成長過程における不安や悩みを抱いており、学校生活に不適應感をもったり、反社会的な行動に走る児童・生徒が増加している。また、学級経営上の新しい荒れの問題も現れてきている。たとえば、平成10年度間の都内公立小・中学校での不登校児童・生徒数は1万人を超え（不登校の出現率を平成9年度と10年度を比較すると、小学校では、0.39%から0.46%に、中学校では、2.73%から3.03%にそれぞれ増加している。）、暴力行為では、小学校では減少しているものの、中学校では増加している。

このように現在の学校においては、今までの指導方法や経験からでは対処しきれない様々な児童・生徒の問題行動が見られ、苦慮している。さらに、中央教育審議会等においては、「心の教育」の必要性が指摘されている。そこで、私たちは、児童・生徒一人一人に、(1)自らを律しつつ、他の人と協調し、(2)他の人を思いやる心や態度を育て、(3)豊かな人間性や社会性を育成し、(4)一人一人の個性を尊重する教育活動を展開することが重要であると考え、自己実現を支援する生活指導の機能を生かしながら、児童・生徒一人一人に「豊かな心」をはぐくみたいと考え、本主題を設定した。

これまでの生活指導は、ややもすると道徳的な価値の強制や対処療法的な指導が中心であった。これからは、児童・生徒の心の揺れを的確に把握・理解し、自らが課題を克服できる力を育成し、より心の通い合う生活指導へと質的転換を図ることが重要である。そのためには、自己指導能力の育成を全教育活動を通じて組織的、計画的に展開することが大切である。

自己指導能力	○自分をありのままに認める力 ○自分を正しく理解する力 ○自分のよさを見つけ、可能性を伸ばそうとする力
--------	---

自己指導能力を上記のようにとらえ、この力をはぐくみ、伸ばすためには、児童・生徒理解の在り方を追究し、自ら課題を克服する活動を意図的・計画的に取り入れ、生活指導の充実・強化を図っていくことが重要であると考えた。そのためには、

- 自己存在感を与えること
- 共感的人間関係を育成すること
- 自己決定の場を与えて、自己の可能性の開発を援助すること

の3つの要素を機能させた取組をしていくことが重要であると考えた。

2 研究の仮説

教師が教育相談的な手法を生かして児童・生徒理解を深め、様々なかかわりを大切に
した活動を工夫し、展開することにより、

- (1) 自己存在感が高まり、自己決定できる児童・生徒が育成される。
- (2) 他の人のよさに気づき、相互に認め励ます豊かな人間関係が構築でき、
- (3) 自己指導能力が育成され、生活指導の質的改善を図ることができるとともに、豊かな心が育成される。

上記の仮説に基づき、研究を進めるに当たっては、2つの分科会を設け、「児童・生徒理解」（第1分科会）と「人間関係づくり（かかわり）」（第2分科会）を視点に研究を進めることとした。

3 研究構造図



Ⅱ 第1分科会の研究

研究主題

教育相談的手法を生かした児童・生徒理解

1 研究主題についての基本的な考え方

これまでの生活指導に対する認識は、ある問題行動に対して対症療法的な指導や教師側による一方的な指導に止まる傾向にある、というものであった。一方で、近年の子どもたちの言動には、「学級の新しい荒れ」「キレる子現象」などに見られるように、従来の指導では十分な対応が困難な状況が生じてきている。本来、生活指導は自己指導能力を育てようとする機能である。児童・生徒が自分をありのままに認め、自分を正しく理解し、自分のよさを見つけて可能性を伸ばそうとする力を高めることが目標である。問題行動に対する指導においては、児童・生徒が自分自身で問題を解決していけるような力をつける、予防的・開発的生活指導が必要であり、そのためにも「見えにくくなっている」と言われる不透明な子どもたちの生活行動に対して、教師の今まで以上に深い児童・生徒が求められている。

第1分科会では児童・生徒を理解するための手法として、教育相談的手法を中心に考えることとした。教育相談的手法には様々な手法があるが、ここでは、教師が専門的な手法を新しく身につけて活用することに重きを置くのではなく、日常の学校生活の中で一人一人の児童・生徒をかけがえのない存在として尊重し、成長の可能性を信じ、見守るなど、かかわり方の姿勢に重点を置いた。具体的には、日常的にかわされる声かけ、かかわり、会話や行動などの中から、児童・生徒の心情をうかがい、受け入れる「心」と「技」を、教育相談的手法であるにとらえた。

本分科会では、児童・生徒の思いを教師が適切にとらえ、児童・生徒が「認められた」という意識を持つことで、自己存在感が生まれ、主体的な行動を喚起することができ、その結果として豊かな心が育っていくのではないかと考えた。つまり、学校生活の中のさまざまな場面で児童・生徒の行動、言葉、様子（表情やしぐさなどの非言語コミュニケーション）の中から、児童・生徒のより良く生きようとする気持ちを見取り、受け入れ、肯定的にとらえることで、児童・生徒が「理解されている」という意識を持つことができ、このことによって、児童・生徒が安心して学校生活を送り、自己決定に向かえるのではないかと考えた。

2 研究の方法

本分科会では、「清掃活動」を検証の場として取り上げた。なぜならば、清掃活動は、公正心や責任感を培う場としてとらえられること、小・中学校に共通した場であること、主体的な行動が現れにくいと考えられ、教師の児童・生徒理解による変容が期待され、検証の場としては相応しいと考えたからである。

しかし、児童・生徒理解の場面は、清掃活動のみならず学校生活全般にわたるものであり、本分科会では、検証の場面ではなくとも、登校から下校までの全ての場面において、教師の児童・生徒理解が豊かな心をはぐくむ前提となると考えている。

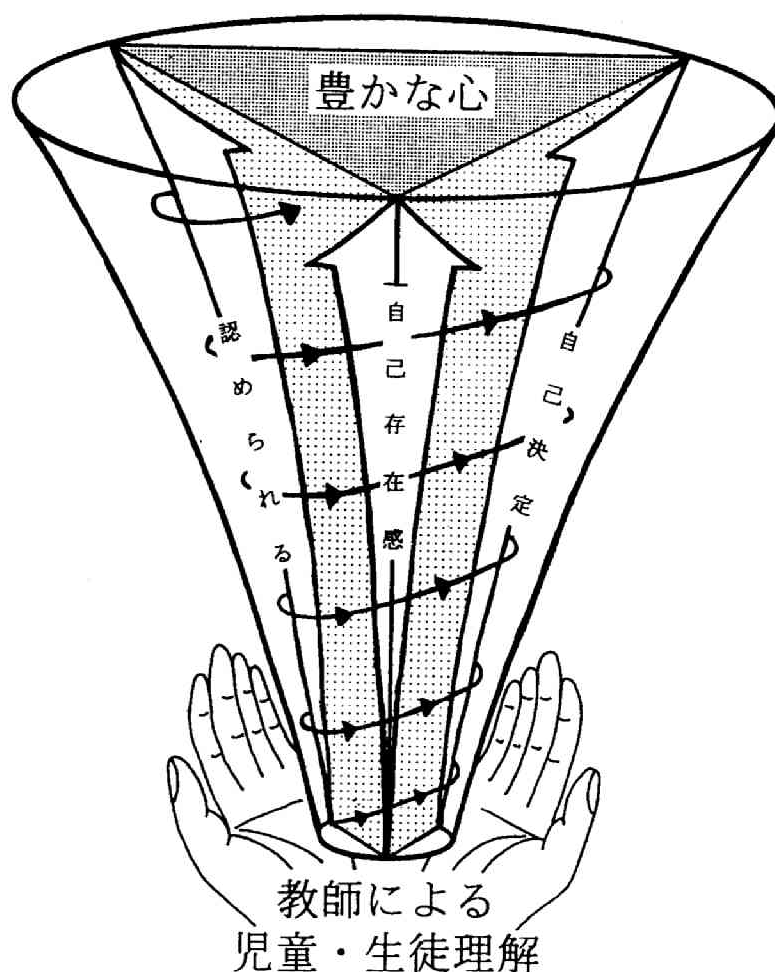
3 研究の仮説

本分科会では、研究の仮説を

教師が児童・生徒の理解を深め、認めることにより、児童・生徒の自己存在感が高まり、自己決定する力が育成される

とし、研究を進めてきた。ここで言う「認める」とは、児童・生徒の思いを教師が肯定的に評価することであり、また「自己存在感」とは、児童・生徒が、ありのままの自分を受け止めることである。そして、下の構想図のように、「認められる」→「自己存在感をもつ」→「自己決定する」というサイクルにおいて、児童・生徒の自己指導能力を育てることができると考えた。また、それを支えるのが教師の児童・生徒理解であると考えた。教師の児童・生徒理解が深まることによって、児童・生徒は「認められた」という満足感が高まり、次の主体的行動につながり、自己指導能力が高まっていくとともに、豊かな心が育っていくのではないかと考えた。

4 研究構想図

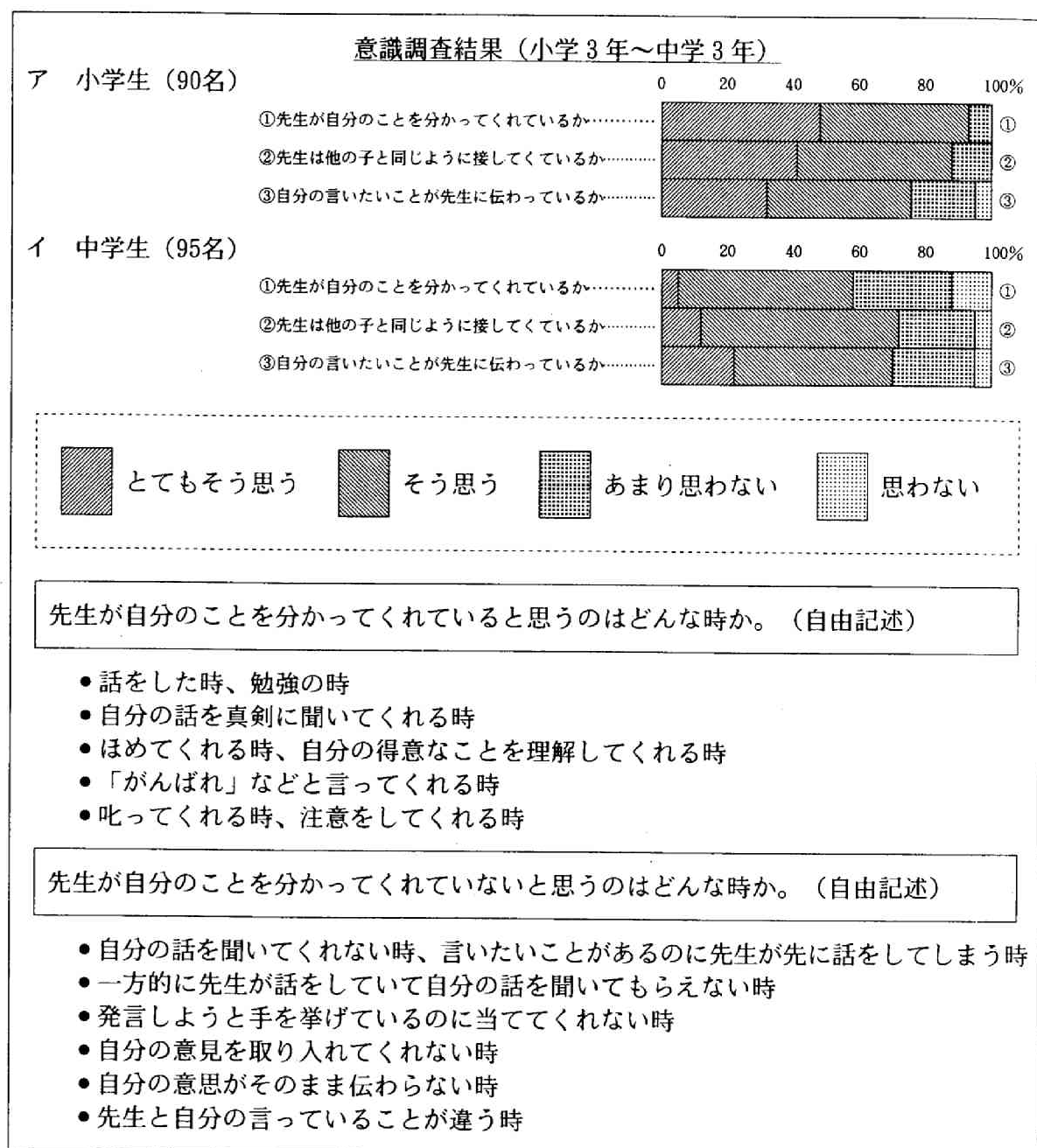


5 意識調査

(1) 集約方法

- 対象 小学校3年生から中学校3年生（6校）
- 調査数 185名
- 実施時期 平成11年7月

(2) 調査結果



- ア 小学生の90%が、「分かってきている」としているが、中学生は60%と低い。
- イ 学年に関係なく、教師の言葉かけによって、分かってもらえている、受け止められていると感じている。
- ウ 話を聞いてくれない、意思が伝わらない場合に、分かってもらえないと感じている。

エ 70%の児童・生徒が、現状で「先生が自分のことを分かってくれている」と思っているとしたうえで、教師のかかわり方を尋ねた結果、認められる時、叱ってくれる時の両方で、「自分のことを分かってくれている」と答えている。

6 清掃活動を通した児童・生徒理解

(1) ねらい

今回の研究では、清掃活動を取り上げた。教育相談的手法を生かすことにより、児童・生徒が清掃をやらされているという意識ではなく、主体的に取り組むという意識を持たせたい。このような教師自身の意図的な実践の積み重ねこそが、日常生活の様々な場面において児童・生徒の主体的な行動を促すことにつながると考える。

また日常の清掃活動場面だけでなく、学級活動などの時間を活用して清掃に対する意識の調査や清掃の仕方を考える、あるいは美化強化週間を設けるなどの取り組みを計画的に行うことで、児童・生徒のにとっての清掃についての課題が明確になり、自分としてどうかかわっていくのかを考える契機となるのではないかと考えた。

こうした日常の児童・生徒の清掃活動と、教師の計画性が相まって、児童・生徒理解のためのかかわりを強めることにつながり、日常生活の様々な場面においても、教師自身の共感的理解をベースにした児童・生徒理解がさらに確かなものになると考えた。

(2) アンケート調査

『そうじについてのアンケート』
 () 年 () 組 () 番
 名前 ()
 学校生活の中の「そうじ」について質問します。
 ○を付けてください。

1. あなたは、「そうじ」をするのが好きですか。
 ①とても好き
 ②すこし好き
 ③あまり好きではない
 ④まったく好きではない

2. あなたはすすんで「そうじ」をすることがあります吗。
 ①よくある
 ②すこしある
 ③あまりない
 ④まったくない

3. なぜ「そうじ」をするのでしょうか。
 (自由記述)

4. 「そうじ」をしてよかったと思うことはありますか。
 ①ある→それはどんなときですか。(自由記述)
 ②ない→それはどんなときですか。(自由記述)

清掃活動への取り組み度を、意識面（縦軸）と行動面（横軸）とし、それぞれ4段階で測定するアンケートを取り、各児童・生徒の出席番号を座標に記入していく。座標上の位置が右上にある程取り組み度が高いとし、主体的に清掃活動ができると考えられる。

9月 実施		第 2 問 (行動面)			
		④	③	②	①
第 1 問 (意識面)	①		5	15	
	②		16 20 48	13 31 32	9
	③		6 8 10 14 33 34 36 37 44	2 19 38 39 41 46	35 47
	④	12 17 18 40	1 3 4 7 11 42 45	43	

A中学校の集計結果

(3) 日常活動での教育相談的手法

教師が、児童・生徒をかけがえのない存在と考える教育相談的な立場に立って、日常、行っている行動を機能的に分類すると以下のようにまとめることができる。

観察



共感的理解



受容



[かけがえのない存在]

同行



傾聴



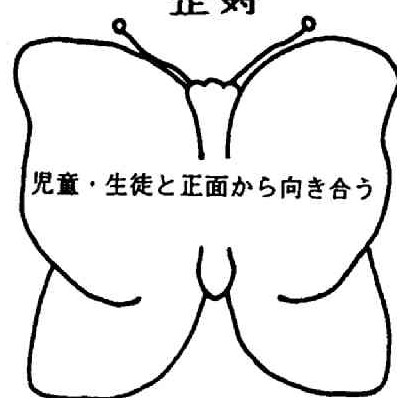
行動療法



声かけ



正対



(4) 関連的指導での教育相談的手法

	活 動 の 流 れ	教育相談的配慮事項
気 づ く ↓ 思 い を 持 つ ↓ 思 い を は ぐ く む ↓ 思 い を 深 め る	※段階は時数ではない 第1段階 今までの学校生活を振り返って、清掃についての意識調査を行う。 第2段階 なぜ清掃をするのかを話し合う。 • アンケートに書かれていた意見も適宜紹介する。 • うまくいっていること、うまくいかないことを出し合う。 • 意見を出し合うことを主眼とする。 第3段階 汚れていることを体感する。 ○ 教室や学校のどんな場所が汚れているのか、グループ活動で探す。 例) • 校庭に落ちているゴミの数や場所を調べる。 • 教室や廊下の埃のたまりやすい場所をセロハンテープなどを使って探す。 • 水道場の汚れは何か調べる。 • 用務主事などに話を聞く。 ○ グループごとに調べたことを発表する。 第4段階 自分の清掃の仕方を振り返り、これからはどうやって進めていけばよいか、工夫できることはないか考える。 例) • 清掃用具の使い方 • 清掃分担の仕方 • 反省会の持ち方 • 清掃全般にわたって 第5段階 学習してきたことを実際に行動し、確かめる。 • きれいになった実感が持てるか。 第6段階 取り組みを通して、自分を振り返る。 • アンケートや作文など	○ 児童・生徒の素直な思いが出せるようなアンケート項目を設定する。 ○ 児童・生徒の実態把握。思いを知る。 ○ 清掃を怠けている個人に対して攻撃をしてはならないことを理解させる。 話し合いの場面においては―― ○ 意見を出す児童・生徒だけではなく、聞き手となっている児童・生徒の表情や反応の仕方などにも注意する。 ○ 小グループで出された意見を学級全体の話し合いにつなげていくことで、多くの意見を吸い上げる。 ○ 行動の良し悪しを決定する話し合いではないことを理解させる。 活動の場面においては―― ○ 一人一人の興味がつながらる場面を設定する。 ○ 活動の様子を観察し、励ましの声かけをする。 ○ 活動の中で見えた変容について、適宜児童・生徒の成長を促せるように認め、返していく。 ○ 児童・生徒が調べてみたいと考えた場所を主体的に調べさせる。 ○ 汚れていることに対する嫌悪感も大事にする。 ○ 実際の汚れを見た上で、考えられるようにする。 ○ 怠けがちだった児童・生徒にも活躍できる場を見つけさせる。 ○ 今までも熱心に活動してきた児童・生徒も十分に認める。 ○ 自分の行動の変容につながらる話し合いになるように援助する。 ○ 話し合ったことが生かされているか。 ○ 友だち同士のかかわりの中から生まれたことにも注目する。 ○ 教師自身も共に活動する。 ○ 短期間ではなく、一定期間の様子、変容を観察する。 ○ 変容をつかむ方法を工夫する。 ○ 変容が見られたことについて児童・生徒に返していく。

(5) 実践事例

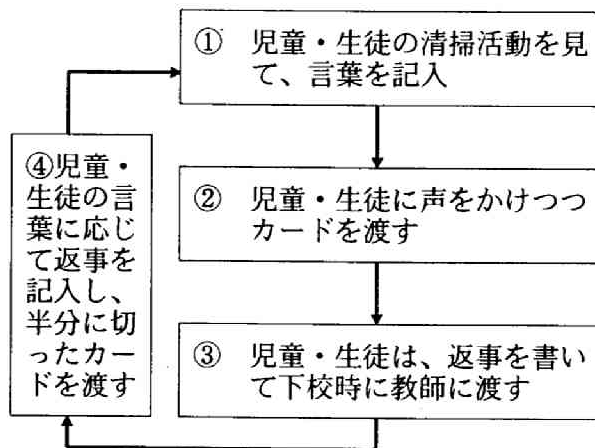
ア 「Uターンカード」の活用（日常活動）

毎日の清掃活動に取り組む姿を、認め励ますことを目的とした。活用上の配慮点としては、

- ・監視されていると感じさせないこと
- ・他人の告げ口にならないようにすること
- ・全員にカードが届くように工夫すること

である。その結果、児童・生徒は教師に見守られている安心感を持つことで、照れながらも返事を書き、主体的に清掃に取り組むようになってきた。

「Uターンカード」の活用・手順



【中学校3年の例】

【〇〇〇〇】さんへ 10月21日 清掃場所（1F廊下） いつも、まじめに清掃を やってくれていて、その姿は とってもいいですね。	果敢と責任 おまかせ おまかせ
思ったことや感じたことや意見などを書いて。（名前 〇〇〇〇） 「そうじはめんどうくさいけど、自分達が生活する所だからそうじは当然だと思う。（いぼす。）」 自分達ははめらねえ本 しいです。	【〇〇〇〇】さんへ Uターン たしかに面倒かもしれませんが、自分たちの生活の場だから、喜んで、できるようにね。もっといいよね。

【小学校5年の例】

へ イスおろしをテキパキやってくれ、気分がよくなります。

名前
かどの所がきつなから、だから今度やてきれいにする。

へ 黒板の水いき、ありがとう。黒板がきれいになって助かりました。

名前
黒板がきれいになって気持ちよかったです。

へ 自分から、すすんでゴミをとる仕事をしてくれましたね。

名前
ほうきではめらねえ、そんなにいいねい。はでさなかった。

へ 自分で気がついて、チリトリを持って来てくれましたね。

名前
和は、そんなこと気にしていなかったけど、なんかうれしい。

へ 水道の前の石だたみは、ゴミがあるか分かりづらいのよ、気がつきましたね。

名前
今度は水道をヤります。

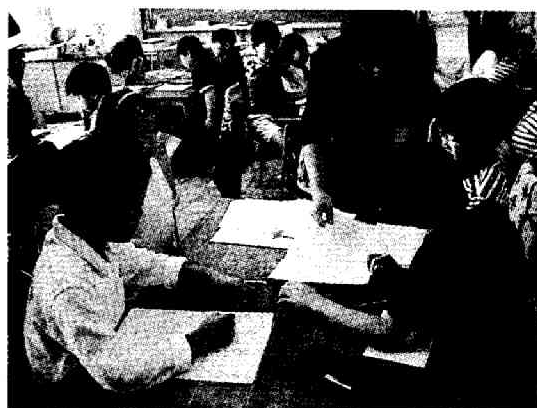
教師が、良かったことを認め励ましているにもかかわらず、児童は自分の良くなかった点を反省していることも多かった。次の清掃活動で、自主的な行動を行う契機となった。

イ 関連的指導での取組（小学校３年生）

(ア) 題材名「クリーン大作戦をしよう」

(イ) 児童・生徒理解の工夫

- 一人一人の課題を明確にする。
- グループ学習を取り入れ、一人一人役（司会、記録、連絡、チェック）を分担する。
- 机間指導を丹念に行い、観察、声かけをする。



(ウ) 学習計画

「なぜ、そうじをするのだろうか？」（学級活動）

「どのように、そうじをしたらよいのだろうか。」（道徳）

「汚れている所を探検しよう。」（学級活動）

「探索して、知りたいと思ったこと。」（学級活動）

「知りたいと思ったことを調べよう。」（社会・理科）

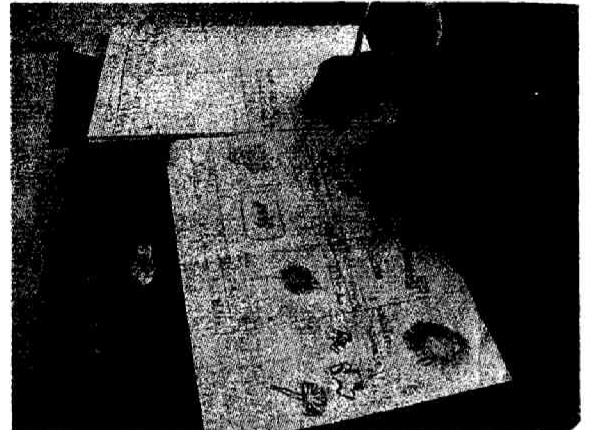
「調べてわかったことから、自分のしようと思うことを発表しよう。」（国語）

(エ) 本時の展開

学 習 活 動	援 助	教育相談的配慮事項
「クリーン大作戦」発表会の準備をしよう ①学習することを確認する。 ②資料をもとに、まとめをする。 ● 1班：まとめ方の話し合い ● 2班：下書きカード ● 3班：動機、わかったことの話し合い ● 4班：下書き ● 5班：動機、わかったことの話し合い ● 6班：清書（本づくり） ● 7班：下書き ● 8班：動機、わかったことの話し合い ③学習のまとめをする。 ● 各班の進度を発表する。（記録係） ● 各班の学習の様子を発表する。（チェック係）	● 班ごとに本時の学習予定を知らせる。 ● 各係の仕事を確認する。（司会、記録、連絡、チェック） ● 学習のルールを確認する。 ○ 立ち歩かない。 ○ 声の大きさ。 ● 画用紙、模造紙、筆記用具を用意する。 ● 机間指導をする。 ○ まとめかたを助言する。 ○ 話し合いの様子を観察し、動機とわかったことをわかりやすくまとめるように助言する。 ● 次時の学習予定を確認する。	○ 進度に差が合ってもよいことを伝える。 ○ 係の仕事を果たしていることを賞賛する。 ○ 話し合いの声の大きさが適当であることを賞賛する。 ○ 真剣に課題に取り組んでいる児童を賞賛する。 ○ 励ましあって学習していることを賞賛する。 ○ 進度にこだわらないようにする。 ○ 発表したら、拍手をする。 ○ 各班の学習の様子のよい所を賞賛する。

〔資料〕

班 題	児童の学習活動と教育相談的配慮
1 班 そうじ今昔	・身近な人に、小学生の頃の学校でのそうじの様子を聞き取り、自分たちのそうじとの違いをまとめる。 ○資料が少ないので、聞き取りで集めた情報を有効に使うように援助するとともに、励ましあって学習していることを賞賛する。
2 班 リサイクル	・燃えないゴミのリサイクル（スチール缶・アルミ缶・ビン）について図書室の本で調べている。 ○一人一人の作業が中心となるが、司会係の児童一人の考えにならないように観察し援助する。調べよう、学習しようとする意欲を賞賛する。



ウ 関連的指導での取組（中学校2年生）

(ア) 「教室美化徹底期間」の取組

(イ) 自分達の教室に目を向け、各班が徹底目標を設定し、日替わりで教室そうじに当たり、一週間で教室をどれだけきれいにすることができるかとして、「教室美化徹底期間」に取り組むこととした。

時	指 導 内 容	教育相談的配慮事項
1	① VTRを見て、清掃状況を振り返る ② 改めて教室を見渡し、助言 ③ 「教室美化徹底期間」の各班の徹底目標設定	① 動機づけ ② 現状を見つめる（洞察） ③ 目的意識を持たせる（行動療法）
2 （一週間）	① 日替わり教室清掃の実施 ② 帰りの学活時 全員：「美°化美°化カード」の記入 教室担当班：班長の評価、先生の評価 ③ 期間終了日に、「美°化美°化カード」を回収	① 客観的事実のメモ（観察） ともに取り組む（同行） 取り組みながら話を聞く（傾聴） ② がんばったこと、きれいになったことへの賞賛（自己有用感）
3	① 「美°化美°化カード」にコメントを付けて返却する ② 通常の分担清掃に戻る	① 一人一人のがんばりをコメントに記入し渡す（認める） 一週間の成果を肯定する（認める） ② 上記配慮の積み重ねを心がける

（ピカピカカードの記入例）

教室美化徹底期間

1 班 名前

改めて2Aの教室を見渡し、改めて一週間の目標を立てよう。

ゆがにも「ゴミ」が「たてこん」からいふ

清掃VTRを見て一週間の目標を立てよう。

そうじをきつとやってみよう。

がんばり、

教室清掃で一日10分で取り組むアイデア

12月のおきなで「がんばり」を「たてこん」に

「たてこん」に「ふとん」を「たてこん」に

（「たてこん」に「ふとん」を「たてこん」に）

美化美カード（教室美化徹底期間）

取り組み日	清掃箇所	達成度	協力度	頑張っていた友達とその内容
10/29金	2A～2B廊下	A B C	A B C	「たてこん」の「ふとん」を「たてこん」に
11/ 1月	図書室	A B C	A B C	「たてこん」の「ふとん」を「たてこん」に
11/ 4木	2A～2B廊下	A B C	A B C	「たてこん」の「ふとん」を「たてこん」に
11/ 5金	図書室	A B C	A B C	「たてこん」の「ふとん」を「たてこん」に
11/ 8月	教室	A B C	A B C	「たてこん」の「ふとん」を「たてこん」に
先生より 11月12日は「たてこん」の「ふとん」を「たてこん」に				
君達から どういたしまして。あまり「たてこん」を「たてこん」に				

7 研究の成果

- (1) 教師の日常的な行動機能の多くが、教育相談的手法そのものに当たることが認識できた。
- (2) (1)に気づくことで、さらに教育相談的な姿勢で児童・生徒に接することができた。
- (3) 清掃活動の場面を取り上げたことで、小学校では日常指導と関連的指導とを組み合わせた点が有効であった。
- (4) 中学校においては、教師が生徒と共に清掃をしながら、ほめたり、意欲を出すような声かけをするなど、コミュニケーションを図り、教育相談的な対応ができた。
- (5) 本研究を通して、児童・生徒の豊かな心が育ったかについて、さらに検証の必要があった。そこで、「そうじについてのアンケート」（7ページ参照）をさまざまな実践ののち、再実施し、前回との比較をした結果、下記のような変容が見られた。

9月 実施		第 2 問 (行動面)			
		④	③	②	①
第 1 問 (意識面)	①				34 40
	②		14 36 45	3 7 9 13 32 43	
	③	8 11 15	16 33 37 38 42 44 47	4 5 35 35 39 41	10
	④	2 12	1	6	

➡

11月 実施		第 2 問 (行動面)			
		④	③	②	①
第 1 問 (意識面)	①			43	34 40
	②		14	1 2 3 4 7 9 32 36 38	39
	③		6 11 35 37 41 42 44 45 47	10 13 16 33 46	8
	④	12	15		5

表を比較すると、学級全体の意識や取り組みの変化もわかり、児童・生徒の変容も個々に把握することもできる。大きく変容した者もいれば、そうでない者もいる。清掃という一つの面から見た結果ではあるが、その結果を見て、教師は一人一人にさらに目を向けていく材料とすることが大切である。

8 今後の課題

- 児童・生徒の豊かな心を育てていくために、より一層深い教師の児童・生徒理解の手だてを明確にする必要がある。
- 全ての教師が、児童・生徒をかけがえのない存在として認識する教育相談的な姿勢を持つとともに、学校全体としても教育相談的な姿勢についての共通認識を深め、指導に当たる方策の具体化が必要である。
- 小・中学校の連携、スクールカウンセラーや関係機関など地域との関係を構築した取り組みを進める必要がある。

Ⅲ 第2分科会の研究

研究主題

かかわり合いを大切にした活動の工夫

1 研究主題設定の理由

最近の子どもたちは、人と人とのかかわる機会が減少し、人間関係を作ることが苦手だと言われている。協調性に欠ける子どもや自分を表現する仕方が分からない子ども、相手の気持ちを考えた発言や行動ができない子どもが増えている。その結果、学校生活の中で、子ども同士や子どもと教師との人間関係が築きにくくなっている。子どもたちの人間関係を築く力の弱まりは、不登校やいじめ、非行などの誘因になるだけでなく、生活指導の目標である自己実現の基盤となる力の弱まりともとらえることができる。したがって、子どもたちの人間関係を築く力を向上させることは、現代の子どもたちにとって、重要な課題だと言えるだろう。

本分科会では、子どもたちに人間関係を築く力をつけさせるために、学校の教育活動の中に、意識的に人と人との かかわり合う活動を取り入れて行く必要があると考えた。かかわり合いを大切にした活動を、意図的・計画的に集団に課していくことで、子どもたちに自己存在感を持たせ、共感的人間関係をはぐくみ、自己決定の場を与えることができる。その結果、相互に認め、励ます豊かな人間関係が育成され、子どもたちに「豊かな心」をはぐくむことができると考え、本研究主題を設定した。

2 研究の仮説

本分科会では、意図的・計画的にかかわり合いを工夫した活動を行うことによって、子どもたちによりよい人間関係を学ばせ、子どもと教師及び子ども相互の豊かな人間関係を育てることができ、豊かな心が培われると考えた。

自己存在感、共感的人間関係、自己決定の3つの要素は、豊かな人間関係を育成するために特に重要と考え、次のように定義した。

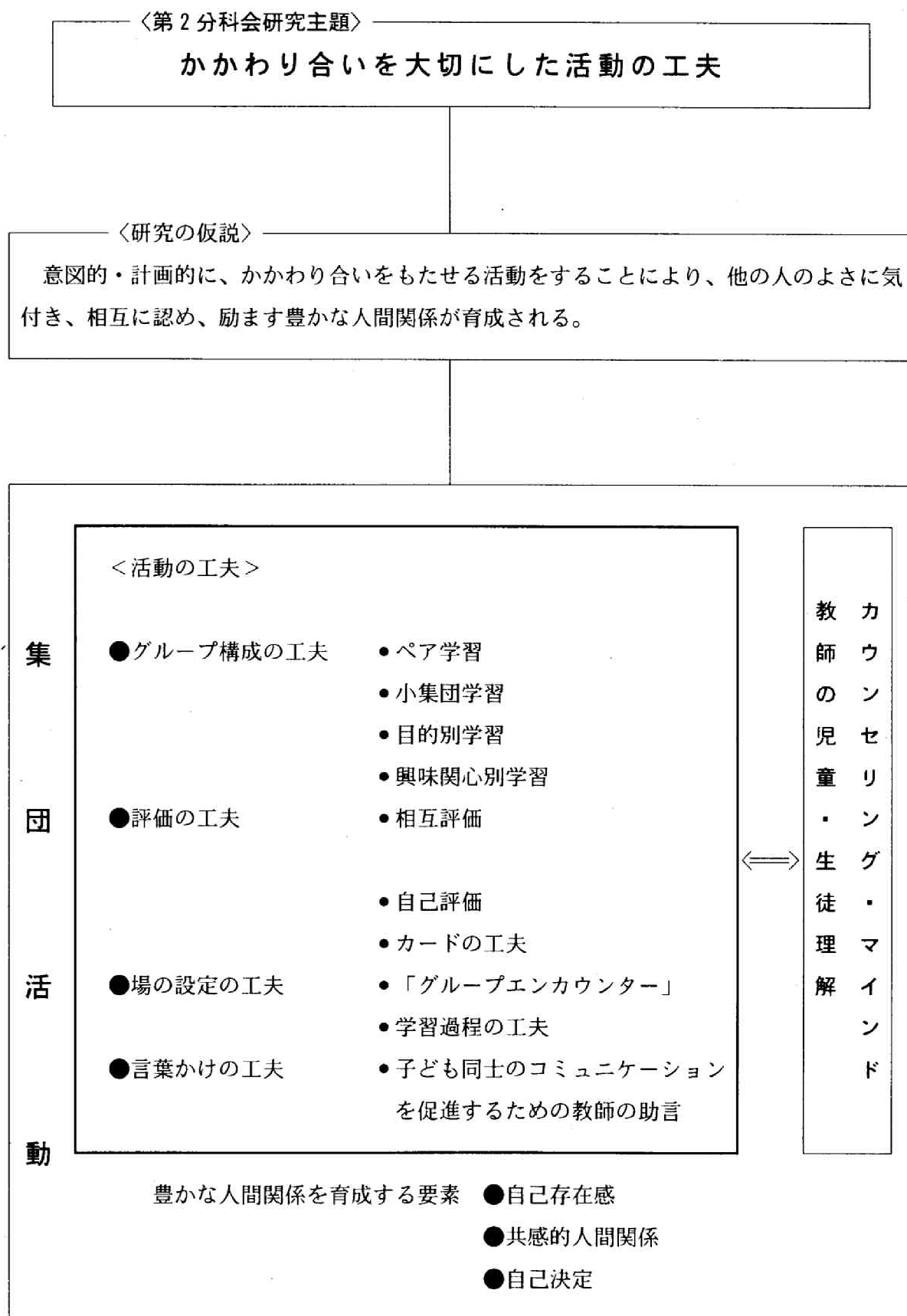
自己存在感	自分の役割がある。自分が他に認められ、必要とされていると感じる。
共感的人間関係	相手を認め、受入れ、尊重する。
自己決定	自分の考えで自分の行動を決定し、行動する。

以上のような考えから、研究の仮説を次のように定めた。

<研究の仮説>

意図的・計画的に、かかわり合いをもたせる活動をすることにより、他の人のよさに気付き、相互に認め、励ます豊かな人間関係が育成される。

3 研究の構想図



※(1)「かかわり合う」とは、複数の人間が同じ場所にいて見合う、言葉をかけ合う、よさを伝え合う、教え合う、認め合う、高め合う、素直に欠点を言い合えることとらえた。

4 実践研究

実践事例1 小学校第5学年 体育科

単元名 水泳

(1) 主題との関連

● グループ構成の工夫（ペア学習）

学級の中では、誰とでもペア・グループが組めることが望ましい。しかし、実態に応じること、かかわりを深めさせていくことが学習成果を大きく左右することとなる。

まずはかかわり合いを深めさせていくことに重点を置くことが大切である。初めから児童が相手を特別に意識しないよう、身長順等でペアを組むこととし、学習の進め方のみを常に意識の中心に置かせて進めることである。また、自分に適しためあてを見つけることやペアに助言をするための資料となるヒント、クロール・平泳ぎ・スタート・ターン等の技能のポイントを図や言葉で明示した学習カードを作成することも大切である。

この学習の流れが定着すると、同時に人間関係が深まると考えられる。また、人間関係が深まることにより、児童は学習カードからだけではなく、自らの既習の経験を生かした明確な助言をペアの相手にすることができるようになると考えた。

● 評価の工夫

学習を振り返り自己評価して、次のめあてを明確にしておくための学習カードを工夫する。また、自分のめあてとペアのめあてがいつでも確認でき、また互いに認め、励まし合ったことが記入できる評価カードを作成する。

資料・[評価・めあてカード]

月 日()	ペア名	
今日のめあて	ク・平・背・ターン・スタート	部分 手・足・呼吸・全体
○今日のめあて		
ペア・先生の声		
自分の反省		
めあてについて	◎・○・△	ペアとの協力 ◎・○・△ 安全 ○・△

資料・[振り返りカード]

1 泳力はどれくらいのびましたか 始めの級 今の級
2 ペア学習の感想を書きましょう (1) 自分でめあてを決めたり練習方法を 決めたりすることはどうでしたか。 (2) ペアと練習してよかったことは。 (3) ペアに一言。

● 場の設定の工夫（「本時の学習」参照）

○認め合い・励まし合いのできる場の工夫

- 水慣れの位置 プールに向かって前後はペア。水慣れのときから、ペアで本時のめあてについて話し合い、関連する泳ぎをチェックできるようにする。
- 各自のポイント練習の場+確かめる場 1、2、3コースは25mを泳ぎながら自分の泳ぎを確かめたり、練習したりする。4、5コースは、12.5mを使い、初歩的な泳ぎを確かめたり、ポイント練習をしたりする。

● 言葉かけの工夫

○認め合い・励まし合いのできる言葉かけの工夫〔児童・教師〕

児童が一言で分かるポイントをつかんだ言葉かけを工夫する。また、学習資料にも明記し、児童同士でも共通認識できる言葉にしておく。

○教師のかかわり方

- 言葉かけが行われていないペアに対して⇒

『○○ができている』と言ってあげよう。」など実際にアドバイスする言葉を伝える。

- 「できている」、「できていない」だけしか声かけができないペアに対して⇒

アドバイスする児童と一緒に歩いて泳ぎを観察する。その時に泳ぎを一緒に分析し、アドバイスのポイントを考えられるようにする。

- できていないことが互いに分かっているペアに対して⇒

どんなめあてが適切か、考えられるように助言する。

- アドバイスが相手になかなか伝わらないペアに対して⇒

「動作を入れて説明してごらん」と声をかける。

できていることを何回も練習しているペアに対して⇒

めあてができていることを賞賛するとともに、次のめあてを考えさせられる。



(2) 本時の学習

1. 泳ぎのめあてをもち、めあてに合った練習ができる
2. 友達と協力して練習することができる
3. 約束を守り、安全に注意して学習することができる

2 時間

学習活動	学びのねらい	自己存在感に関する	共通的人間関係に関する	自己決定に関する
1. 着替える 2. 足を洗う 3. 準備運動をする 4. ショーローをあびる 5. ペアを組み、本時の学習内容を確認する。(5分) 6. 自分のめあてをはっきりさせながら泳ぎをする	今日のめあてを確認できるようにするため、学習カードを配布する 約束を守ってすばやく準備ができるように助言する 本時のめあてを相手に伝える時間を設定する 相手の泳ぎは立ってはっきり見よう声をかける	水慣れの場 ●は教師位置	男子2列 女子2列	
7. ペアに分かれ、自分のめあてを確認する 8. ペアごとに練習する (10×2)	コースを組んだ児童の例(泳ぎに挑戦する) ●途中で、めあてがはっきりしなくなった児童が、めあてを再確認できるように、学習カードを提示する ●各自のめあてがわかる型を工夫する。(右記の場)			
児童の活動 1. ペアで本時のめあてを確認し合う 2. 自分のめあてについて練習するコースに移動する 3. 泳ぎのフォームの確認をする 4. ビート板を使い、ななめ足でコースを泳ぐ 5. 本時のめあてを達成めながら泳ぐ	児童の活動 1. ペアで本時のめあてを確認し合う 2. ペアとともに移動する 3. 泳ぎのフォームを確認する 4. ビート板を使い、ななめ足でコースを泳ぐ 5. 本時のめあてを達成めながら泳ぐ	●基本的な姿勢、水、呼吸、が大切であることを互いに助言する 児童はともに児童入を見て、めあてについて相手に伝えたいことを引き出す 互いに協力しているペアを賞賛する	1. 4コース・2.5mを泳ぎながら練習する 2. 各担当の場所で、児童相互の言葉かけを援助する 3. 4. 5. 4コース・泳ぎ練習 5. 4コース・ボール練習	
9. ペアごとにめあての達成について話し合う 10. 準備運動をする。(40分) 11. ショーロー、洗眼、着替える	ペアの中に、二人の話を聞き、学習の成果を認めるとともに、次の学習に意欲を持たせる言葉かけをする			

(3) 考察

- グループ構成の工夫・・・互いに的確なアドバイスをすることができていた。学習の流れが定着し、学習の中での自分の役割をしっかりと認識するとともに、ペアの必要性を意識した活動ができた。
- 評価の工夫・・・学習が進むにつれ、ペアの言葉かけが活発になってきた。「ペアがいたから今までがんばれた。」「とても感謝している。」「お互いに進級できてよかった。」「友達が一人増えたような感じがする。」などと振り返りカードに書いている児童が多い。
- 場の工夫・・・友達や教師のアドバイスを受け、自ら次のめあてを設定すること、また練習の場を決定することができ、自分の考えを生かした活動が見られた。
- 言葉かけの工夫・・・児童間の言葉かけが不十分なペアに対しては、教師がその仲介役に入ることにより、コミュニケーションを促進することができた。

実践事例2 小学校第3学年 社会科

単元名 「みんながわかる町マップをつくろう」(学校のまわりの様子)

① 主題との関連

- グループ構成の工夫(興味・関心別学習)

この単元では、基本的にグループでの学習を中心に行う。

グループの構成
興味・関心別

地域内の同じ場所を「おすすめの場所」として
選んだ者同士でのグループとする。

個人・・・自ら決定した場所を調べていくことで、意欲の継続が図れる。
集団・・・ひとつの場所を調べていくという共通の目的のもとに、共感的な人間関係が形成しやすい。

価値・・・自分で選んだ対象に対して積極的に取り組み、友達と互いに協力していくこと。

※自分で「おすすめの場所」を決められない児童に対しての支援

- 「〇〇くんがよく遊びに行く場所や家のそばの場所を思い起こしてみたら。」と助言
- 「〇〇さんのグループはどこを選んだのかな。」と親しいグループに目を向けるよう助言(協力して取り組むことを考えて)

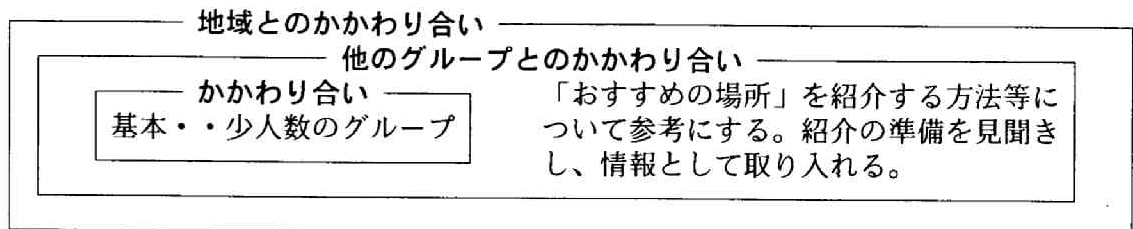
自分の役割を見つけられなかったり
見失ったりする児童

グループの人数は、最大5人まで
各自が役割を持つようにする

自己存在感をもつことができる

- 話し合い・作業の進行役
- 「おすすめの場所」の紹介役
- 場所までの行き方の説明役 等

- 場の設定の工夫(かかわり合いの範囲を広げる)



- 言葉かけの工夫(『メッセージカード』の活用)

「おすすめの場所」
各グループでそれぞれ工夫して発表する



『メッセージカード』を送る。
「ここがよかったです」(内容・方法のよさを認める)
「こうしたらどうですか」(アドバイス)



互いに認め、高め合う姿勢



② 本時の学習（8／12）

- ねらい ・取材してきた新たな発見を取り入れて、グループで「おすすめの場所」の紹介の仕方を考える。
 ・他のグループのまとめ方を情報として取り入れ、グループの活動に生かす。

○展開

№	○主な学習活動	◆支援 ※指導上の留意点	【 】関わり合いの視点から
10	○ グループで取材してきたことを絵地図の中に書き加え、「おすすめの場所」までの町の様子をまとめる。	※ 担当の児童を中心に進めさせる。 ◆ 新たに必要なマークができれば、全体に図る。 ◆ 話し合いのポイントを明らかにする。	【それぞれの役割を果たす＝自己存在感】 【自分の考えを出す＝自己決定】 【協力して作業を進める＝自己存在感】
20	○ 「おすすめの場所」の紹介の仕方を考え、カードに記入する。 ・ ○○さんに聞いて録音した話をカセットデッキでそう。 ・ 撮ってきた写真を見せよう。 ・ クイズ形式で発表しよう。	◆ 紹介のための視点を与える。 ・ みんなが行きたくなくなるように ・ おすすめの理由をはっきりと ・ 取材を生かして楽しい方法で	【お互いの意見を聞き合いながら、発表の内容、方法を考える＝共感的人間関係】
6	○ 他のグループの活動の様子を見て、よかった点を発表する。 ・ 内容（いい発見） ・ 方法（取材方法、まとめ方）	◆ 自由に他のグループの活動を見てもよいこととする。 ※ 分からないことは質問をさせる。 ◆ 内容的なことと方法的なことに分けて整理する。 ◆ 機器を準備し、他の児童にわかりやすく見えるようにする。	【他のグループのよさを認め合う＝共感的人間関係】
6	○ よいと認められたことについて発表する。 （発表予告編、2グループ程度）	◆ 「メッセージカード」を用意する。	
3	○ 他のグループの絵地図、紹介の仕方でもよいところを「メッセージカード」に書く。	◆ 「メッセージカード」を用意する。 【自分の考え方が認められる＝自己存在感】	



- 評価 ・取材したことを生かして、「おすすめの場所」の紹介の方法を工夫できたか。
 ・自分が考えたことをグループ内外に、的確に伝えられたか。

③ 考察

・グループ構成の工夫について

興味・関心別にグループを構成すると、学習に対して意欲的に取り組み、話し合いも円滑に進んだ。また、工夫した発表の方法を考えたり、自主的な態度で各自の役割を担おうとしたりする態度が見られた。かかわり合いを深めるには、このグループ構成は有効な手だてということが分かった。また、個人が役割を持ったことで、仕事に責任を持てるようになり、自己存在感を感じ取ることもできた。

しかし、話し合いが停滞したグループもあった。そこには、自己存在感が持てるような助言が必要である。

・場の設定の工夫について

他のグループのよい点を自分たちの活動に取り入れるよう助言すると、子どもたちは、互いのよさを認め合えるようになった。

・言葉かけの工夫について

「メッセージカード」には、他のグループの発表のよいところを認める言葉が、多く書かれていた。そのカードを送られることで自分たちが認められたと考え、自己存在感も味わうことができた。「メッセージカード」は、自己存在感を高め、共感的人間関係を深めるのに有効であった。

メッセージカード

○わかりました。
 (昔の建物がある戸) かっこいい。おじさんかどてもむかしな建物かすきなりのかわかりました。いろいろな建物かかき、てあるのかいわかりました。
 ○ここがよかったです。こうしたらどうですか。
 本物のおじさんの声をうつしてきたり、写しんとかもとったりしていいなと思しました。

メッセージカード

○わかりました。
 サミトのエスカレーターから見えるいろいろ変わる店があてその前には100円ショップがあたのがわかりました。
 ○ここがよかったです。こうしたらどうですか。
 もんたいかカセットでいねいて答えてカセットでよかったです。

実践事例 3 小学校第3学年 学級活動

単 元 名 「質問ゲーム」で、班の友達と もっと仲良しになろう

(1) 主題との関連

① この単元における主題のとらえかた

かかわり合いを大切にした活動として、ここでは、直接、自己存在感や共感的人間関係を高めたり育てたりすることをねらいとした「グループ・エンカウンター」を意図的・計画的に学級集団に課していく。

このような集団の中での活動や体験を通して、集団が児童一人一人を育てるような学級運営を工夫し、その集団の効果がその他の学習活動にも生きて働くようにする。

② 3つの要素と、この授業における具体的な児童の姿

自己存在感が実現している状態とは	● グループの友達みんなから質問を受け、それに答えるとき。 ● 「言葉のプレゼント」で、友達に、「いっしょに遊ぼうね。」とか、「仲良くしようね。」などと、言ってもらえたとき。
共感的人間関係が深まっている状態とは	● 友達のことをわかろうとする質問を考えたとき。 ● 質問したりされたりという、友達とのかかわりを楽しいと感じたとき。 ● 友達のことを知ることが、楽しいと感じたとき。 ● 友達と自分の共通点を知って、嬉しいと感じたとき。 ● 友達について、ただ表面的なことだけでなく、内面的なことについても知ったとき。 ● 友達と自分の違いに気づきながらも、仲良くなれそうな気持ちを持ったとき。
自己決定の場面とは	● 質問したり、答えたりするとき。 ● グループの友達と仲良くしようと思ったとき。 ● 遊ぶ約束などのように、具体的に友達とかかわっていこうとする行動をとったとき。

③ 主題に迫るための具体的な方策

● 「グループ・エンカウンター」の意図的・計画的な実施

- クラス替え直後から、継続的に構成的なグループ・エンカウンターを実施していく。
- 学級の実態に合わせてを構成的に実施するグループ・エンカウンター方法を創意工夫する。
- 児童が「グループ・エンカウンター」を常に楽しいと感じられることを大切にする。
- 「グループ・エンカウンター」を通して、個々の児童理解を深め、日常の教育活動に生かす。

● グループ構成の工夫（生活班の編成方法）

- 4～5人のグループとし、毎日班替えを行う。その際、できるだけ今まで、同じ班になったことのない友達を自分で選択して、児童同士で班編成を行う。
- 班編成の直後に班の人間関係を深めるため「グループ・エンカウンター」の手法のひとつであるSK法を工夫した「質問ゲーム」を行う。

● 自己評価カードの工夫と活用（「振り返りカード」）

- 短時間に、全員が書ける行数とし、書く内容の観点をカードの中に示す。書いたことを読み合うことを通して、児童相互の人間関係を深めることができる。
- 児童一人一人の状態を知り、変容を見取ることができる。

(2) 本時の学習

学習活動と内容	予想される児童の反応	かかわりを深めるための支援
導入 5分	○「質問ゲーム」をするときのポイントについて確認する。 「よく考えて、相手を分かろうとする質問をしよう。」 「相手の目を見て、相手にわかるように話そう。」 「相手が答えやすい質問をしよう。」	● 友達のことがわかる質問をあらかじめ児童が考えておくようにし、黒板に掲示する。 ● 相手によく伝わる話し方を考えられるように助言する。 ● どんな質問をすると、相手が答えにくいのか、考えるよう助言する。
展開 25分	○ グループで順番に1人の友達に対して相手をわかろうとする質問をする。 「兄弟は、何人ですか。」「好きな遊びは何ですか。」 ○ 3分ごとに次の友達と質問を受ける役を交代し、グループ全員が質問を受けられるまで繰り返す。 ○ 「言葉のプレゼント」をするときのポイントを話し合う。 「お願いします。」や「ありがとう。」の挨拶をしよう。 ○ 握手をしながら、今日のゲームの中での友達の印象を交換し合う。この「言葉のプレゼント」を全員が、他のメンバー全員からもらえるまで繰り返す。 「これからも友達でいようね。」「また、遊ぼうね。」	● 答えたくない質問には、答えなくてもよいことを助言する。 ● 話し合いにうまく入れない子どもには、入れるよう声かけをする。 ● これまでの「質問ゲーム」の「言葉のプレゼント」で、言ってもらって嬉しかったことは、どんなことだったか、考えるよう助言する。
まとめ 15分	○ 「振り返りカード」に今日の「質問ゲーム」の感想を書く。 ● 「楽しかったこと、うれしかったこと、わかったこと、友達に対して思ったこと、自分に対して発見したこと」という観点の中から書く。 ○ 感想を読み合い、交流する。 「友達のことが、よくわかった。」「楽しかった。」	● 全員が短い時間で書けるよう、カードの形式を工夫する。 ● できるだけ多くの児童の感想を紹介し、感情や経験を分かち合う。

(3) 考察

● 「グループ・エンカウンターを構成的に実施する」の活用と工夫について

4月のクラス替え当初は、児童同士のもめごとが多く集団行動をとることが難しい状態であった。そこで、「構成的グループ・エンカウンター」を意図的・計画的に学級集団のルールが自然と確立されていった。その結果、どの児童にとっても居心地のよい学級集団となり、学習活動もスムーズに行われるようになった。また、「構成的グループ・エンカウンター」を学級の実態に合わせて工夫し、継続的に積み重ねていくことが、効果的であることが分かった。「質問ゲーム」も、さらに工夫する必要がある。

● グループ構成の工夫について

できるだけ同じ班になっていない友達と班作りをすることによって、児童は、友達のことを知るの楽しい、いろいろな友達のことをもっと知りたいと思うようになった。「質問ゲーム」は、友達のことをよく知り、友達とかかわることの楽しさを味わうことができるため、毎回、児童に好評であった。1ヶ月たって、班の友達と別れるとき、班の友達みんなに、「言葉のプレゼント」（一言感想）をカードに書いた。人間関係が深まったことが伝わる言葉を書くことができ、自分に対してのカードを読むと、児童は大変喜んでいて、今回のように、グループ構成の方法を工夫とすると、児童相互の人間関係が深まることが分かった。

● 自己評価カードの工夫と活用について

「振り返りカード」の感想を読むと、その時間の心理状態が明確に文に表れていた。時には、ニコニコマークへの落書きから、どんな気持ちだったのかを汲み取ることができた。友達と、うまくかかわれなかったことが読み取れた児童には、あとで、よく話を聞いて助言すると、その後の友達とのかかわりは好転した。

「グループ・エンカウンター」を行った結果生じる様々な児童の反応を見て、すみやかに個々の児童に適切な対応をしていくことが、よりよい学級集団づくりのために大切であることがわかった。

〔資料1〕M児の変容（「振り返りカード」より）

6月→ぜんぜん楽しくなかったです！それと、ぜんぜんいみがわかりませんでした。

9月→この3ばんの人ぜんいんいい人だとわかった。

10月→もっと、Nくんとなかよくしたいなあ。あと、SさんとYさんともなかよくしたい。
あと、もうちょっとでなかよくできるのに。

11月→この1ばんは、いいはんになれていい友だちになるかなあ。ぼくはなれると思います。

いいはんになるぞ。1ばん。

〔資料2〕0児の11月の「振り返りカード」→



今日の『異時ゲーム』は、どうでしたか？

楽しかったこと
うれしかったこと
わかったこと
友達に対して思ったこと
自分に対して思ったこと

なまえ()

みなさんの手のひまどか り か た。
またあそぼうね、とまわってうめした。
た。またりけはくにな れるというい



5 第2分科会のまとめ

本分科会では、児童・生徒に「豊かな人間関係」を育てるためには、教師が意図的・計画的に児童・生徒のかかわり合いを教育活動の中で行っていくことが大切であると考え、様々な方策（活動の工夫）を考えた。（研究構想図14頁参照）

そして、二学期にそれに基づき、小学校3校で実証研究授業を行い、その方策についての実効性を考察することにした。以下、本分科会の研究についてまとめる。

(1) 研究の成果

① 活動の工夫

グループ構成

⇒

取り組む内容（単元）により、構成人数や興味、それまでの人間関係等を考慮することにより、かかわりが広がり、深まりが認められた。

学習のめあて

⇒

一人一人の学習のめあてを明確にすることにより、子ども同士の言葉かけの機会が増えるとともに、教え励まし合う言葉が多くなった。

言葉かけ

⇒

児童間の言葉かけに、教師が仲介役として支援・援助することが、かかわり合いを築き、育てることに有効であることが分かった。

② その他

意図的・計画的な活動を工夫することにより、新たな児童・生徒理解の機会を得ることができた。

(2) 今後の課題

- ① 研究授業を行う中で、意図的なかかわり合いを持たせる活動に様々な方法があることが分かってきた。さらに、かかわり合いを深める活動を工夫していく必要がある。
- ② 今年度の研究の中では、人間関係の深まりを客観的に把握することが不十分であった。
- ③ この研究を進めていく中で、中学校教師が小学生を指導する場面があった。そこでの成果を考えると、小・中学校の連携は単に情報交換にとどまらず、実践の場においても可能であることが分かった。今後は、積極的に実践の場で連携していくことが望まれる。

IV 研究の成果と今後の課題

研究主題「豊かな心を育てる生活指導」のもとに、二つの分科会を構成し研究に取り組んだ。ここでは、二つの分科会に共通してあげられた成果と課題について述べる。

1 研究の成果

(1) 教育相談的手法を生かした児童・生徒理解

清掃活動を通しての実践の中で、教師が、児童・生徒を「かけがえのない存在」と考え、児童・生徒の声に耳を傾けたり、共に行動したり、観察したりなどすることで、児童・生徒の姿がより鮮明に見えてきた。このように見えてきた児童・生徒の姿を教師が「認める」ことで児童・生徒は、自らの行動を決め、実践するようになった。このことにより、教師が用いる教育相談的手法は、児童・生徒理解を深める上で有効な手だてであることが確認できた。この手法は、全教育活動にも生かすことができると考える。

(2) かかわり合いを工夫した活動

教師が児童・生徒理解を深め、意図的・計画的に具体的なアドバイスや言葉かけの工夫、グループ構成、場の設定、評価の工夫などかかわり合いを工夫した活動によって、友達よさに気づき、相互に認め、励ます好ましい人間関係の改善を図ることができた。

また、この研究過程の中で、中学校の教師と小学校の教師によるチームティーチングの実践授業ができたことは、小・中学校の連携を深める上で有効であった。

(3) 「豊かな人間関係」の構築

生活指導の目的である「自己指導能力」を育てるために、豊かな人間関係の構築が大切であると考え、実践・研究を進めてきた。その結果、児童・生徒に「自己存在感」を与え、「共感的な人間関係」を育成し、「自己決定の場」を与えて、児童・生徒の可能性の開発を支援できたのではないかと考える。こうした過程を経、教師と児童・生徒の、また児童・生徒相互の人間関係を深めることができたと考えている。これが今後「豊かな人間関係」の深化へつながるように工夫していきたい。

2 今後の課題

(1) 「規範意識」の育成の必要性

「豊かな人間関係」の構築は、各分科会の実践を通して徐々にではあるが、その方策を明らかにできたと考えるが、現代の子どもたちの課題となっている「規範意識」の育成については踏み込むことができなかった。今後の研究課題としていきたい。

(2) 「豊かな心」の育成

本研究を進めていく中で、研究主題である「豊かな心」が子どもたちに育ったかを検証する時間的余裕がなかった。内面の成長が行動面に現れ、それを「豊かな心」が育ったと言える尺度の開発が今後求められる。

(3) 小・中学校が連携した研究の継続

小・中学校の教師が、それぞれの特性や長所を生かしながら、児童・生徒の発達段階に即した指導の手だてを実証できたと自負している。児童・生徒の意識の変化に伴い、小・中学校の教師が、十分な協議と実践ができる継続的な研究を進めていくことは、今後益々重要となってくるのではないかと考える。